

Title	近代初期イギリス旅行記における好奇心
Sub Title	Curiosity in early modern English travel writings
Author	高橋, 三和子(Takahashi, Miwako)
Publisher	慶應義塾大学藝文学会
Publication year	2007
Jtitle	藝文研究 (The geibun-kenkyu : journal of arts and letters). Vol.92, (2007. 6) ,p.281(14)- 294(1)
JaLC DOI	
Abstract	
Notes	
Genre	Journal Article
URL	https://koara.lib.keio.ac.jp/xoonips/modules/xoonips/detail.php?koara_id=AN00072643-00920001-0294

慶應義塾大学学術情報リポジトリ(KOARA)に掲載されているコンテンツの著作権は、それぞれの著作者、学会または出版社/発行者に帰属し、その権利は著作権法によって保護されています。引用にあたっては、著作権法を遵守してご利用ください。

The copyrights of content available on the KeiO Associated Repository of Academic resources (KOARA) belong to the respective authors, academic societies, or publishers/issuers, and these rights are protected by the Japanese Copyright Act. When quoting the content, please follow the Japanese copyright act.

近代初期イギリス旅行記における好奇心*

高橋 三和子

いつの時代でも旅行と好奇心は、密接な関係にあることは確かであろう。近代初期、イギリスの旅行者達も、好奇心を胸に大陸旅行へと出発し、旅行記を記した。では、彼らの好奇心とはどのようなものだったのだろうか。17世紀初期に出版されたイギリス人によるヨーロッパ旅行記からジョージ・サンズ (George Sandys) の *A Relation of a Journey* (1615) とトマス・コリヤット (Thomas Coryat) の *Crudities* (1611) を取り上げ、彼らの好奇心は、どのような性質を有しているのかを分析する。各旅行記の作者の個人的な背景と興味を踏まえ、両旅行記における古典作品からの引用に注目することにより、両者の好奇心の相違を明らかにしたい。当時、旅行記中に古典作品への言及、及び引用を用いることは、例外的なことではなかったが、それらが用いられる文脈に注目することにより、各旅行記における好奇心の指向性を読み取ることが出来ると考える。

ジョージ・サンズ (1578-1644) とトマス・コリヤット (1577?-1617) は、両者ともオックスフォードで学び、ジェームズ一世の宮廷に仕えた。サンズは、1610年に旅行に出発し、1615年に *A Relation of a Journey* を出版すると、チャールズ一世のもとヴァージニア植民地の監督を務める。また、1621年には、オウィディウスの *Metamorphoses* の翻訳を出版したことで知られる。¹一方、コリヤットは、ジェームズ一世の非公式の道化師として知られる。彼は、晩年の1608年に旅行に出発し、1611年に *Crudities* を出版している。また、さらなる旅行記の執筆を意図してオリエントに旅した

が、1617年、インドで客死した。コリヤットは、オックスフォードで古典を学んだ経歴を持ちつつ道化師、旅行家として活躍した人物である。²両者の経歴を鑑みると、サンズは、旅行家のみならず役人として活躍し、古典の翻訳家としての活動が見られる一方、コリヤットは、自由奔放な道化師且つ旅行家の行動がうかがえる。このような個人の背景、興味は、旅行記における好奇心の矛先に重要な影響を与えていることは言うまでもない。

では、サンズは、どのような好奇心から旅に出て、旅行記を書いたのだろうか。A *Relation of a Journey* の序文から彼の旅行記の記述方針を見てみたい。³

[...] I haue not onely related what I saw of their present condition; but so far as conueniency might permit, presented a briefe view of the former estates, and first antiquities of those peoples and countries: thence to draw a right image of the frailty of man, and mutability of what so euer is worldly; and assurance that as there is nothing vnchangeable sauing God, so nothing stable but by his grace and protection.⁴

ここでサンズは、訪れた国々の現在の様子だけではなく、過去の状態や歴史についても記述し、その変化を描き出すことにより、人間社会の無常さを表したいとしている。彼は、過去についての記述を‘a briefe view’としているが、実際旅行記を読み進めると、読者は、古典作品など過去のテキストからの引用を多用しつつ、過去について多く述べていることにすぐに気が付くだろう。サンズは、古典作品を学問の対象としてだけではなく、現在の社会の理想像として用い、ヒューマンイズムの教育的な側面を強調したテューダー朝ヒューマニストの一人として考えられるのである。⁵サンズは、ウェルギリウスやオウィディウスなどの古典作品や神話、聖書の物語などに頻繁に言及しつつ、訪れた場所を記述している。こうした特色からA *Relation of a Journey* は、イギリスルネサンスの旅行記の中で最も文学的な作品であると言われる。⁶サンズの好奇心は、過去の文学的、歴史的な遺

産に対して向けられているのである。

中世において、好奇心 (curiosity) は、巡礼における悪徳として考えられてきた。巡礼者が自らと向き合うことを妨害し、外の世界へと導くとしてキリスト教徒にとって有害なものであると見られていたのである。また、好奇心の悪徳は、アダムとイブの原罪にまで遡り考えられていた。しかし、中世後期からルネサンスにかけて、ヒューマニスト達によって、肯定的な意味が付されるようになってきた。⁷つまり、歴史や文学といった過去の遺産を知りたいという自然な願望としての好奇心である。サンズの好奇心はこのようなヒューマニズムに基づいた、肯定的な意味を帯びたルネサンスにおける好奇心の初期段階のものであると言える。

では、実際に旅行記中でサンズは、どのように古典作品に言及しているのかを見ていきたい。彼は、ローマ帝国の領土であった地域を意識的に旅し、古典作品や聖書にゆかりのある地を訪れ、その地を地理的に描写すると同時に、その場所と関連した物語に言及している。アヴェルヌス湖を訪れた記述を例に挙げたい。

Leaving this Mountaine on the right hand, and turning about the brow of a hill
that lay on the left; we came to the lake of *Auernus*,

*O're which no sowle vnstrucke with hasty death
Can stretch her strengthlesse wings; so dire a breath
Mounts heauen from blacke iawes. Grecians cald the same
Auerne; the nature figured in the name:*

circular in forme, and enuironed with mountaines, saue there where it seemes to
haue ioyned with the lake of *Lucrinus*: shadowed heretofore with ouer growne
woods; a maine occasion of those pestilent vapours. For they being cut downe
by *Agrippa*, the place became frequently inhabited on euery side: as approued
both healthfull, and delightfull. This was supposed the entrance into hell by

ignorant Antiquity: where they offered infernal sacrifice to *Pluto*, and the *Manes*, here said to give answers. For which purpose *Homer* brought hither his *Vlysses*, and *Virgil* his *Aeneas*:⁸

ここで、サンズは、まず、アヴェルヌス湖の地理的な説明をし、ウェルギリウスの『アエネーイス』から引用して、その名の由来を説明している。また、ローマ軍のアグリッパによって切り拓かれ、多くの人々の居住地となったことなど、その歴史にも触れている。さらに、古代から冥府の入り口と信じられていたことを述べ、ホメロス、ウェルギリウスの記述に言及している。こうしたアヴェルヌス湖に関連した歴史、古典文学に加えて、サンズは、さらにアヴェルヌス湖の挿絵を用いて、より臨場感のある空間的な描写を試みている（図1）。

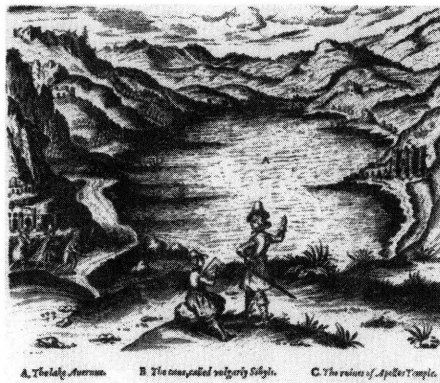


図1 アヴェルヌス湖⁹

この挿絵には、サンズと思しき旅行者達が前方に立ち、湖を指差している。また、サンズは、洞窟へ向かう際、‘We entred it with torches’¹⁰と述べているが、その様子は、挿絵の左下に描かれている。つまり、異なった時間に起きた二つの出来事を一枚の絵にしている。この挿絵は、‘continuous narrative’¹¹と言われるルネサンス絵画の技法を用いて描かれている。¹²旅行者を湖の周りに配することにより、アヴェルヌス湖が歴史的、文学的に重要な場

所であったことを強調し、読者に空間的な広がり意識させている。このようにサンズは、古典作品や聖書にゆかりのある歴史的建造物や景勝地をテキスト、挿絵を用いて描写し、読者に物語をその舞台とともに喚起させることに成功していると言える。この説明の後にも、アヴェルヌス湖にまつわる様々な伝説や神話をエウスタティオス、キケロ、シリウスなどから紹介している。それに続いて、さらに湖の周囲の地理的な説明とシビュラの洞窟への道筋を述べている。このような、古典作品をその作品と密接に関係のある場所の描写の際に引用するという記述から、サンズの古典作品そのものへ向けられた興味を読み取ることが出来る。

また、サンズの古典作品そのものへの興味は、伝説を物語る時、一つの伝説を述べるにとどまらず、あらゆる可能性を過去のテキストから挙げている点からも読み取られる。ルクリヌス湖の描写において、この湖に伝わる少年とイルカの友情の物語について以下のように言及している。

But beleue who that will, the story of the Dolphin frequenting this Lake, reported by *Plinie* vpon the testimony of *Mæcenas*, *Flauianus*, and *Flaiius Alsius*, who inserted it in their chronicles; said to haue hapned not long before his time, in the reigne of *Augustus*. [...] *Appian* doth witnesse as much: and *Solinus*, that it became so ordinary a spectacle that no body did admire it. [...] *Pausanias* doth report himselfe to haue bene an eye witnesse almost of the like. And *Pliny* speaks of another about *Hippo*, when *Flauianus* was Proconsul of *Africa*: [...]. If these be true, why may we not credite the story of *Arion* the musitian (for Dolphines are said to be singularly delighted musicke) related by *Herodotus* and others? But because I thinke it a fable, I will rather choose the report of a Poet. Who when enuironed with sword by the trecherous mariners,

---Not life (*quoth he*) craue I;

But leaue to touch my harpe before I dy.

They giue consent, and laugh at his delay.

A crowne that might become the king of Day,

*He puts on; and a faire robe rarely wrought
With Tyrian purple. The strings speake his thought.
He (like a dying swan shot through by some
Hard heart) sings his owne Epicedium.
And then, cloth'd as he was, he leapes into
The more safe sea; whose blew brine vpwward flue.
When (past beleefe) a Dolphin sets him on
His crooked backe: a burden erst vnknowne.
There set, he harps, and sings: with that price payes
For portage; and rude seas calmes with his layes.¹²*

サンズは、少年とイルカの物語について、博物誌家、歴史家、地理学者などあらゆる人々による過去のテキストから読み取られる目撃談に言及した後、オウイデイウスの『祭暦』からの引用を記述している。ここでサンズは、こうした記述が少なからず伝説を含んでいることを認めてはいるものの、この物語にまつわる、知る限りの古典テキストを紹介し、客観的な視点から述べようとしている意識がうかがえる。ジョナサン・ヘインズは、サンズは、正しいとする一つのテキストだけに注目し、他のテキストを切り捨てるのではなく、あらゆるテキストを総体として捉えることを彼の知的活動の基盤に置いていると指摘する。¹³ これは、ここでの少年とイルカの物語に関して言えば、サンズは、一つの物語を個人的な視点から受け止めるのではなく、様々な過去のテキストとの対峙を重視するというより学問的な視点から物語に取り組んだ上で、自らの主張へと至っているということであろう。このようなサンズの古典作品への学究的な態度と古典作品の舞台である地を訪れるという旅行スタイルは、ヒューマニストとしての姿勢に基づくものであり、ここから生まれる客観的な好奇心は、ヒューマニスト的な好奇心の表れと言える。

それでは、一方でコリヤットは、どのような好奇心を持って旅をし、*Crudities* を記したのであるだろうか。¹⁴ *Crudities* の序文で、コリヤットは、自ら

を学識ある旅行者ではないとし、重々しい事柄 (weighty matters) を書くことを意図してはいないと述べている。¹⁵ ここで彼が示唆していることは、自らは、同時代のサンズのようなヒューマニスト的な旅行者ではなく、また彼の旅行記は、古典作品の研究、または歴史や文学について物語ることを目的としてはいないということであろう。また、記述する事柄について、以下のように述べている。

For we have the historie of Venice (he will perhaps say) already translated out of Italian into English. Therefore what neede we more descriptions of that Citie? Truly I confesse that Cardinall Contarens Commonwealth of Venice hath beene so elegantly translated into English, that any judicious Reader may by the reading thereof much instruct himselfe with the forme of the Venetian government. But that booke reporteth not halfe so many remarkable matters as mine doth (absit dicto invidia) of the antiquities and monuments of that famous Citie, together with the description of Palaces, Churches, the Piazza of S. Marke, which is one of the most beautifull places (I beleeve) that ever was built in any Citie whatsoever of the whole world, and other memorable things of no meane importance. Howbeit were this true that the historie of Venice hath been more then once divulged in our mother tongue, yet I hope your Highnesse will not miscensure me for communicating to my country new notes of this noble City, with a corollarie of Observations that (I am sure) were never before printed in England, [...].¹⁶ (emphasis added)

ここでは、コリヤットが最も多くのページを割いて描写したヴェネツィアの記述について述べているが、ここから彼の旅行記は、何を記述しようと意図しているのかがうかがえる。コリヤットは、ヴェネツィアの歴史や政治に関しては、イタリア語から英訳された書物が出回っており、すでにそれらを読んだ読者も多いだろうと述べ、自らの旅行記は、それらには劣ることを認めている。彼が描きたい事柄は、その街に実際に行つてこそ分か

る建物の美しさや街々に伝わる‘the antiquities and monuments’なのである。コリヤットは、かつてイギリスでは、印刷されたことのないような建物や街の臨場感溢れる様子、‘a corollarie of Observations’を描くことを目指しているのである。Crudities は、訪問地の歴史やその地ゆかりの文学などを中心に記述するのではなく、旅行者の目を通して見た現在の国々の観察やその地で旅行者が体験した事柄を記録しようと意図されていることが分かる。しかし、先に述べたように、コリヤットは、オックスフォードで古典を学び、ルネサンスのヒューマニスト的な教育を受けている人物である。彼は、歴史や古典への興味を持つヒューマニスト的な視点を完全に排除しているのではなく、あえて体験を重視した個人的な視点を強調して描いているのである。

このように序文から読み取られるように、旅行者コリヤットの好奇心は、旅先で自らが観察したり、体験したりしたあらゆる事柄に向けられていると考えられる。先に分析したサンズのヒューマニスト的な好奇心と比べて、より個人的且つ範囲の広い好奇心と言える。コリヤットは、歴史や文学に対して焦点を定めたサンズと異なり、歴史、文学も一つの興味対象にとどめ、他の様々な事柄を自らの体験を重視しつつ記述しているのである。17世紀、‘curious’という語は、「注意深い、綿密な」という意味も持ち、‘curious traveller’とは、「観光をする際、とても注意深く、熱心な旅行者」を意味した。¹⁷ コリヤットの好奇心は、まさにこうした意味を有するものであり、先に述べたヒューマニスト的な好奇心を超えた雑多な豊かさを持っていると言えよう。

では、コリヤットは、どのように古典作品を引用しているのかを見てみたい。以下の引用は、ヴェネツィアの描写からゴンドラの船頭についての記述である。

But the boatmen that attend at this ferry are the most vicious and licentious varlets about all the City. For if a stranger entereth into one of their Gondolas, and doth not presently tell them whither he will goe, they will incontinently carry

him of their owne accord to a religious house forsooth, where his plumes shall be well pulled before he commeth forth againe. Then he may afterward with Demosthenes buy too dear repentance for seeing Lais, except he doth for that time either with Ulysses stop his eares, or with Democritus pull out his eyes. Therefore I counsaile all my countrimen whatsoever, Gentlemen or others that determine hereafter to see Venice, to beware of the Circean cups, and the Syrens melody, I meane these seducing and tempting Gondoleers of the Rialto bridge, least they afterward cry Peccavi when it is to late. For

————— § *facilis descensus Avernī,*

*Noctes atque dies patet atri janua Ditis.*¹⁸

ここでコリヤットは、自分が観察したとする Gondra の船頭の悪行を説明している。Gondra の船頭は、不慣れな旅行者が Gondra へと乗り込み、どこへ行きたいのかを即座に言わない場合、すぐに売春宿 (a religious house) へと導くため、街の中で最も悪党であると述べている。¹⁹ また、このような目に遭わないようにイギリスの旅行者に注意を呼びかけている。この際、コリヤットは、様々なギリシヤ神話のエピソードに言及しつつ、自らの忠告を補強している。もし船頭に騙されてしまったら後悔するという意見を、ユリシーズのように耳をふさいだり、あるいは、デモクリトスのように目を引き抜いたりしない限り、ラーイスに会ったデモステネスのごとく後に深く後悔することになるだろうと補足する。また、巧みに誘惑するリアルト橋の Gondra の船頭をキルケの杯やセイレーンの調べになぞらえて旅行者に忠告を与えている。さらに、神話への言及をウェルギリウスからの引用で補っている。この引用は、地獄への入り口であるアヴェルヌス湖は、いつも汝に対して開かれていると述べているものであり、悪に陥るのは容易いという忠告になっている。このようにコリヤットは、様々な古典作品に言及しているが、それらはどれも彼自身が主張する意見を補足する役割を果たしているにすぎない。先に見たサンズのアヴェルヌス湖

の記述でのウェルギリウスからの引用とコリヤットのここでの引用を比べると、その相違は明らかになる。つまり、サンズは、ウェルギリウスの古典作品をその舞台となった場所の空間描写とともに引用するのに対し、コリヤットは、古典作品の地理的な一致や歴史的な考察は一切することなく、自らの体験、意見を支える装飾的なものとして扱っているのである。コリヤットは、サンズのように古典作品の本来の文脈を旅に結びつけるのではなく、古典文学を本来の文脈から断片的に切り出して、自らの目的のために処世訓のように用いている。このような古典作品の使用法は、以下のサヴォイ地方の描写にも見られる。

This was the manner of their carrying of me: They did put two slender poles through certaine wooden rings, which were at the foure corners of the chaire, and so carried me on their shoulders sitting in the chaire, one before, and another behinde: but such was the miserable paines that the poore slaves willingly undertooke: for the gaine of that cardakew, that I would not have done the like for five hundred. The wayes were exceeding difficult in regard of the steepnesse and hardnesse thereof, for they were al rocky, petricosæ & salebrosæ, and so uneven that a man could hardly find any sure footing on them. When I had tandem aliquando gotten up to the toppe, I said to my selfe with Æneas in Virgil:

— Forsan & hæc olim meminisse juvabit.²⁰



図2 アルプスを越えるコリヤット²¹

この記述は、コリヤットがアルプスを越える際の描写である。コリヤットは、まず、どのようにして山を越えたのかを詳細に記述している。ここで、四方に棒の付いた椅子に乗り、二人の男達に担がれて行ったことを記述しているが、その道がいかに険しく困難であったかを述べている。やっとの思いで頂上へ来た時、彼は、ウェルギリウスからの引用をラテン語で記述している。アエネーイスよろしく「おそらく、これもいつか楽しく思い出すであろう」と独り言を漏らしたとしている。この記述においても、コリヤットは、自らの大変であったアルプス越えの体験を重視し、古典作品からの引用を添えることにより、よりいっそうその大変さを強調していると考えられる。ここで引用されている『アエネーイス』からの言葉は、本来、カルタゴに上陸したアエネーイスが不安を感じつつも、トロイア再興を夢見て、ラティウムを目指し、仲間を励ます場面で用いられている。しかし、コリヤットは、このような物語の文脈を無視し、自らのアルプス越えの困難を表現するためだけに、アエネーイスの言葉を引用している。*Crudities*の扉絵にも、アルプス越えの様子が描かれ、この体験は、この作品中で注目されるべきエピソードの一つであることが分かる（図2）。このようにコリヤットは、古典作品自体と向き合うのではなく、きわめて個人的な出来事や意見を補強するために古典作品の引用を使用している。コリヤットは、サンズのように古典作品ゆかりの地をテキストとともに検証しつつ巡るという一定の旅のスタイルを持たず、自らの興味の赴くままに旅し、訪れた場所とは関係なく自らの頭によぎる古典作品からの引用を記述に挟み込むのである。ここには、サンズのようなヒューマニスト的な好奇心よりも自由で個人的な興味に基づいた好奇心を読み取ることが出来る。彼の好奇心は、過去のテキストを越え、旅先での自らの体験、観察に向けられているのである。

同時代に書かれたサンズの *A Relation of a Journey* とコリヤットの *Crudities* には、それぞれ異なった好奇心が表れていると言える。古典作品の引用の仕方に注目することにより、両者の好奇心の矛先が明らかになった。すなわち、サンズは、古典作品と密接に関りのある場所の描写をする際に

その物語への言及、または引用を記述することにより、旅の契機となった古典作品へと帰着している。このような引用の仕方は、古典作品そのものに対する興味からなされたものであり、過去の遺産へと向けられたヒューマニスト的な好奇心の表れであると言える。一方、コリヤットは、自らが旅行中に観察したり、体験したりした事柄を強調する際に古典作品からの引用を使用している。これは、コリヤットのコリヤットは、旅先で出会ったあらゆる物事に向けられ、個人の自由な感性に依拠した多様な興味を反映したものであることを意味している。サンズの好奇心を肯定的な意味合いを帯びたルネサンスの初期のコリヤットのコリヤットは、さらに発展したものであると言え、両者の好奇心は、ヒューマニズムから生まれた一定のコリヤットのコリヤットは、より自由で個人的な好奇心までの近代初期旅行記における好奇心の広がりを表象するものとして考えられる。サンズとコリヤットは、両者ともオックスフォードで教育を受け、同時代に旅行記を記し、それぞれ、古典作品からの引用を旅行記に記している。同様に、近代初期のイギリス旅行記において、古典作品が引用される時、それらは、ルネサンスのヒューマニズム的な教育に基づいたものであると言えるが、また、それらから、ルネサンスの段階的な変化を持つ好奇心を読み取ることが出来ると言えるのである。

* 本稿の執筆にあたり、慶應義塾大学教授・松田隆美先生にご指導賜り、心から感謝申し上げたい。

注

- 1 サンズの伝記的情報は、以下に見られる。Richard Beale Davis, *George Sandys: Poet-Adventure; A Study in Anglo-American Culture in the Seventeenth Century* (London: Bodley Head, 1955), pp. 89-90.
- 2 コリヤットの伝記的情報は、以下の文献に見られる。Michael Strachan, *The Life and Adventure of Thomas Coryate* (London: Oxford University Press, 1962).
- 3 *A Relation of a Journey* は、1615年 R. Field によって印刷されフォリオ

版でロンドンにて出版された (STC 21726)。本論文では、初版のファクシミリ版 George Sandys, *A Relation of a Journey Begun An. Dom. 1610: Fovre Bookes; Containing a Description of the Turkish Empire, of Ægypt, of the Holy Land, of the Remote Parts of Italy, and Ilands Adioyning*, English Experience, 554, 2nd edn (London: Barrett, 1615; repr. Amsterdam: Theatrum Orbis Terrarum; New York: Da Capo Press, 1973)を使用する。

4 Sandys, 'To the Prince'.

5 イギリスルネサンスのヒューマニズムについては、以下の文献を参照。

Douglas Bush, *The Renaissance and English Humanism* (Toronto: University of Toronto Press, 1939).

6 Jonathan Haynes, *The Humanist as Traveler: George Sandys's 'Relation of a Journey Begun An. Dom. 1610'* (Rutherford, NJ: Fairleigh Dickinson University Press; London: Associated University Press, 1986), p. 40.

7 Christian K. Zacher, *Curiosity and Pilgrimage: The Literature of Discovery in Fourteenth-Century England* (Baltimore, MD: Johns Hopkins University Press, 1976), pp. 3-16.

8 Sandys, p. 279.

9 Sandys, p. 279.

10 Sandys, p. 281.

11 'continuous narrative'については、以下の文献を参照。

Lew Andrews, *Story and Space in Renaissance Art: The Rebirth of Continuous Narrative* (Cambridge: Cambridge University Press, 1995).

12 Sandys, pp. 276-7.

13 Haynes, p. 43.

14 *Crudities* は、1611年 W. Stansby によって印刷されクォート版でロンドンにて出版された (STC 5808)。本論文では、現代版、Thomas Coryat, *Coryat's Crudities: Hastily Gobled up in Five Moneths Travells in France, Savoy, Italy, Rhetia Commonly Called the Grisons Country, Helvetia Alias Switzerland, Some Parts of High Germany and the Netherlands; Newly Digested in the Hungry Aire of Odcombe in the Country of Somerset, and Now Dispersed to the Nourishment of the Travelling Members of Kingdome*, 2 vols (Glasgow: MacLehose, 1905)を使用する。

15 Coryat, 'the Epistle to the Reader', I, p. 15.

16 Coryat, 'the Epistle Dedicatorie', I, pp. 2-3.

17 John Dixon Hunt, *Garden and Grove: The Italian Renaissance Garden in the English Imagination, 1600-1750* (Princeton, NJ: Princeton University Press,

- 1986), p. 73.
- 18 Coryat, I, p. 311.
- 19 ‘a religious house’が売春宿を意味していることは、以下の文献で言及されている。
Ann Rosalind Jones, ‘Italians and Others: Venice and the Irish in Coryat’s “Crudities” and “The White Devil”’, *Renaissance Drama*, 18 (1987), pp. 101-19.
- 20 Coryat, I, pp. 216-17.
- 21 *Crudities* の frontispiece (部分)。